
夢の中の「日常」

笠原綾乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の中の「日常」

【Nコード】

N2580M

【作者名】

笠原綾乃

【あらすじ】

「家のすぐ近くにある」ただ、それだけの理由でバイトを始めた斉藤菜緒子は、突然、そのテーマパークの顔である『姫』に抜擢される。すべてが慣れないことだらけの菜緒子が日々の中で感じる戸惑い・不安。そして……。この作品は沢木香穂里さま主

催の『職業小説企画』参加作品です。ぜひ、ほかの職業ものぞいてみて下さい

なお、この作品は作者である笠原の経験をもとにしていますが、実在の人物、場所、および出来事とは一切関係ありません

1 お姫様

「いらつしゃいませ」

午前9時。正門前。

この挨拶で私の1日は始まる。

「あ！ お姫様だ」

「この子たちと写真撮ってもらってもいいですか？」

淡い桃色に、無数の花びらをあしらった着物に、きらびやかなか
んざしを飾ったかつらをかぶった私に、たくさんの子供たちが寄っ
て来る。

「では、拙者がシャッターを押しましょう。よろしいですか。はい、
ポーズ」

取り囲む子供たちと、笑顔で写真に収まる。

これが、私の「日常」。

ここはある観光地にある、江戸時代を体感できるテーマパーク。

私、さいとつなおこ斉藤菜緒子は、毎日ここで『お姫様』として働いている。

きっかけは、ささいなことだった。

就職先が決まらないまま高校を卒業した私は、『家のすぐ近くにある』
それだけの理由で、ここの飲食のテナントにバイトで入
った。

働き始めてから2週間たったある日、視察に訪れていた運営会社
の社長の

「この子、明日からお姫様やらせなさい」

ツルの一声で、私は『お姫様』になることが決定した。

1 回目の「場内散歩」が終わって、休憩をしに衣裳部屋へ戻る。壁を1周する鏡に映る棚には、きらびやかな衣裳が整然と置かれていて、そのさらに後ろには、たくさんのかつらが並んでいる。

時代劇でよく観る武士・町人。町娘。お姫様から花魁まで。

その下には結う前なのか、長い髪の毛が垂れ下っているかつら、そして作り始めたばかりなのか、髪の毛がついていない、金^{かね}だけのものもあって、けっこう不気味だ。

「あゝあ、暑くてやになっちゃうよね。飯島さん、お茶ちょうだい」
矢^や舂^がの着物のすそを上げた腰役の女の子が、すぐ後ろでかつらを整えている床山^{とこやま}の男の人に、鏡越しに話しかける。

「純ちゃん、それくらい自分でやんなさい」

おでこを手拭いでぬぐいながら、目を離さずにやり返す。

「はいはい。バイトさん、あなたもいる？」

「あ、はい。お願いします」

私は深く頭を下げた。すると、かつらがずれたのがわかる。

「斉藤ちゃん、それかぶつてるときは深く頭下げちゃダメ。何度言ったらわかるのさ」

飯島さんの鋭い声が飛んだ。

「それ、外したら？ まだまだ1日は長いんだし」

純ちゃん、と呼ばれた女の子が、慣れた手つきで私からかつらをはずし、台の上に置いてくれる。

「ありがとうございます」

顔を上げた私は、白と紫の布で坊主のように巻かれた頭を見て、小さくため息をついた。

『お姫様』をやりだして1カ月が経とうとしているのに、未だに慣

れない。

かつらをかぶる前に頭につけるこの羽二重^{はふたい}も、きついドーランも、ここに来るまでは浴衣しか着たことないのに、いきなり裾の長い着物を着せられて。帯もきついし。

おまけにこのお姫様のかつらは私に合っていないのか、おでこの上あたりに金の部分が当たってすごく痛い。

何で私、こんなことしてるんだろう……？

「はい、どうぞ」

「すみません」

私と同じような頭をした純ちゃん、にもらった紙コップのお茶をちびちび飲んでいると、衣裳担当の中年の女性、田島さんが、大きな風呂敷を抱えて入って来た。

「何だ純ちゃん。今日ここだったの？ 言ってくればよかったのに」

「え？ 部署から連絡来てなかった？」

「来てないわよ。てっきり今日は舞台だと思ったから劇場まで行ったのよ」

「ごめん田島さん。あとでシメとくわ」

「こらこら。あまり脅かすな。ただでさえ後輩連中君のこと怖がってるのに」

大きすぎる荷物を乱暴に置いた田島さんの後ろで、飯島さんが笑う。

「これくらい言ってやんないと同じこと繰り返すの。だいたい、私が新人の頃はもったきつかったのに」

「今の子は何かあるとすぐ辞めるからね。やっと衣裳整えたと思ったら『辞めます』だもの」

「それはこっちも同じだよ。なかなか合うかつらがなくてようやく探したのに『お世話になりました』もなしに辞めるんだから」

「だいたい、入ったばかりで何も出来ないくせに、すぐに舞台に出れるなんて思ってるのが甘いの」

純ちゃん、が一気にお茶を飲み干した。

「バイトさん、おかわりいる？」

「あ、これで大丈夫です」

私がバイト、だからなのか。ベテランのようなのに何かと純ちゃん、は世話を焼いてくれる。

「ま、でも斉藤ちゃんは根性ありそうだから大丈夫か」

かつらを整えるくしを耳にひっつけた飯島さんが、ずり落ちたメガネを上げて笑う。

「うん。この子笑顔がかわいってお客さんからも評判いいみたいだしね。続けてもらわなきゃ困るわよ」

語尾を少し伸ばした田島さんが、細い目をさらに細くして納得したようにうなずく。

「へえ。この子、だから『姫』なのか。どうりで、ウチの新人に声がかんなくなっただけだ」

まるで値踏みをするような純ちゃん、の目線に、いたたまれなくなっただけは思わず目を伏せる。

「斉藤ちゃんが気にすることないわよ。だいたい、姫を【部署にいたくないための逃げ場】にしてる子にされてもねえ」

「そうそう。気を抜いて姫やってる子が一番扱いに困るんだよ。下手にプライド高くてさ」

飯島さんと田島さんが、顔を見合わせてため息をついた。

「やつぱそうなんだ。外の仕事もロクにできないくせに。ああ！もう！」

純ちゃん、の大きな声が衣裳部屋に響く。

それと同時に、側用人姿の中年の男性が、声をかけて来た。

「そろそろ【2回目】行きましようか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2580m/>

夢の中の「日常」

2010年10月12日18時37分発行